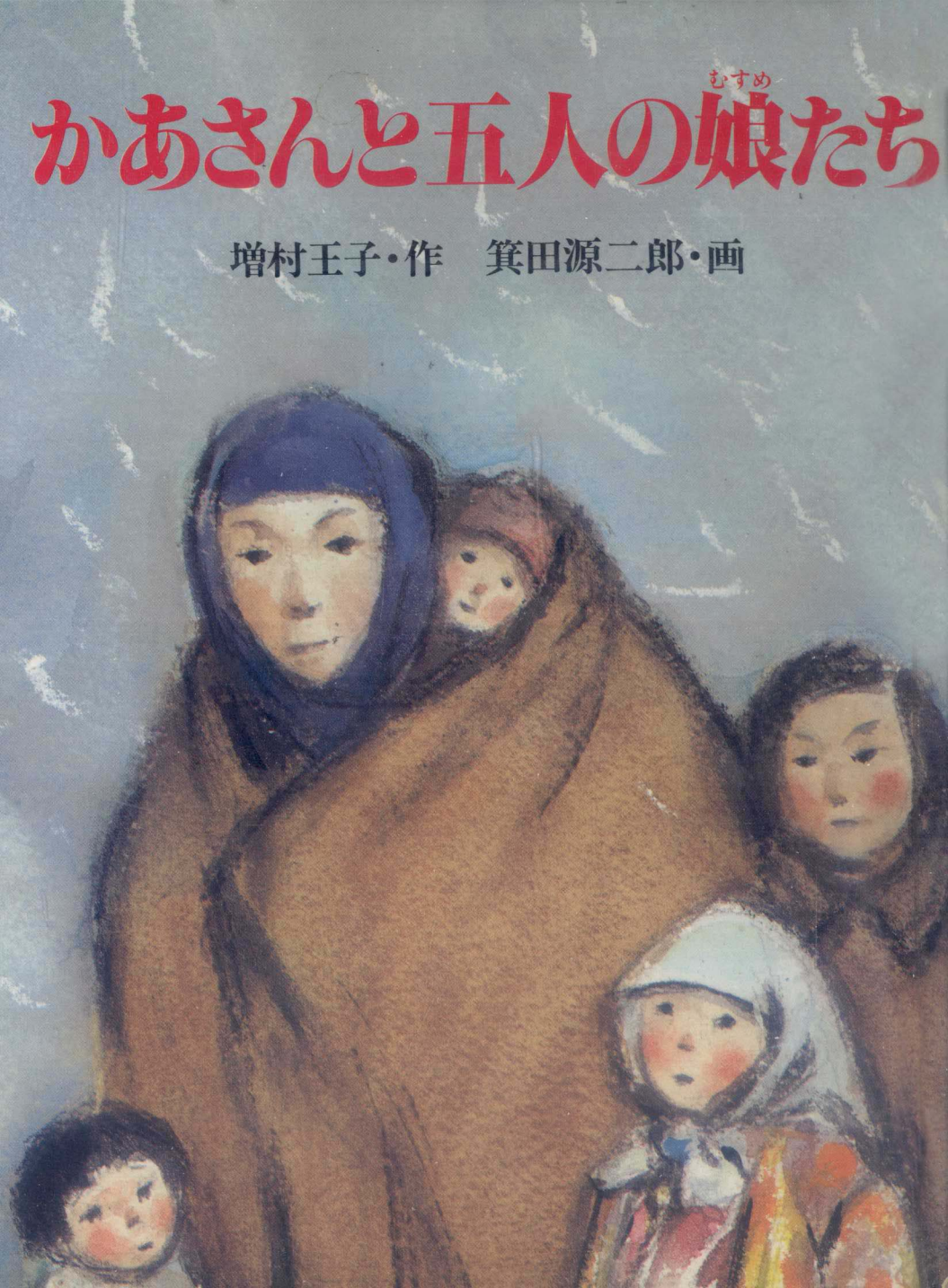
かあさんと五人の娘(むすめ)たち

増村王子・作　箕田源二郎・画



かあさんと五人の娘たち

増村王子・作　箕田源二郎・画

著者・増村王子(ますむら きみこ)
1913年、秋田県に生まれる。秋田女子師範学校第二部卒業後、秋田県、東京都内の小学校に勤務し、東京都氷川小学校図書館の運営をふりだしに、都立教育研究所・有三青少年文庫に勤務。1967年日本子どもの本研究会創立に参加、現在会長。子どもの本と読書教育に関する著書が多数ある。
現住所　〒142 東京都品川区平塚1-9-6

画家・箕田源二郎(みた げんじろう)
1918年、東京に生まれる。教師を経て美術の仕事に専念。日本美術会、日本童美連、新しい絵の会など会員。童画グループ「車」同人。著書に『美術の心をたずねて』。挿絵・絵本に『草の根こぞう仙吉』『おかあさんの木』『へえ六がんばる』『ももたろう』『こぶとり』など多数ある。
現住所　〒194-01 東京都町田市金井町2029-7

※日本音楽著作権許諾第8671041-601号
ほんぷ創作文庫

かあさんと五人の娘たち
1986年10月15日　初版発行

著　者　増村王子©
画　家　箕田源二郎©

発行者　中野吉郎
発行所　株式会社　ほるぷ出版
東京都新宿区新宿2-19-13
サカゼンビル
〒160　TEL (03)354-7031(代)
振替東京　9-43550
印刷所　株式会社　東京印書館
製本所　株式会社　三水舎
製作　株式会社　トーレン

NDC913　248p　ISBN4-593-54011-9 C8093

もくじ

第Ⅰ部　井戸のある家

――上中城町二番地　大正十一年……4

一、早　春……4

1、雪どけ　2、子どもの遊び

二、小さいいのち……22

1、ミコのたんじょう　2、絵雑誌

3、上のたなコと下のたなコ

三、かやり火のころ……40

1、野菜畑　2、かやり火

四、井戸のある家……54

1、共同水道　2、とうさんのむがしこ

五、雪の季節……66

1、冬じたく　2、クリスマス

3、年越し　4、お正月

第Ⅱ部　水びたしの町

――手形堀反町　大正十二年～昭和三年……99

一、雨　季……99

1、引っ越し　2、ももわれ事件　3、水あまし

二、関東大震災……114

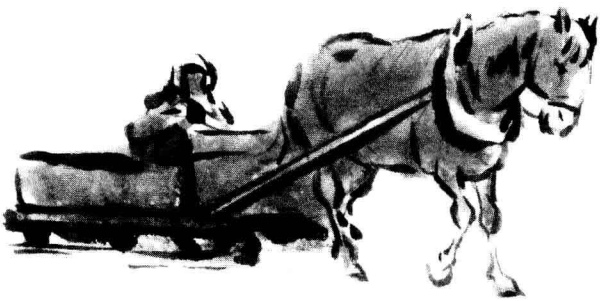
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三、いたずら……124
四、およめさん……138

第Ⅲ部　広小路裏

――上中城町四番地　昭和三年～八年……152

一、ウスケ六女……152
　1、新築　2、ウスケ六女　3、かあさんのよめいり話
二、編物会と子ども会……169
　1、通信簿　2、産婆さんの仕事
　3、編物会　4、子ども会
三、転勤……186
四、流浪の民とバザー……195
五、死んで生まれた赤ちゃん……209
六、月の素顔……218
　1、お化けの出る田んぼ道　2、小さな白い天文台
七、スキー大会……232
　1、十七才の春　2、手形山スキー大会
あとがき……246



第Ⅰ部　井戸のある家

――上中城町二番地　大正十一年

一、早　春

1、雪どけ

北国は、春のくるのがおそい。

野も山も、町なみも、白一色だった雪景色が、節分をすぎて南風がふきはじめるころから、黒ずんだ灰色に変わり、じゅくじゅく、よごれた雪どけの季節がやってくる。

「かあさん、なくなったと思ったお手玉、雪の下から出てきたあ。こんなによごれてえ。」

ことし五才で、四女のトコが、黒っぽいボロきれみたいなのをつまみあげて、裏の縁がわのところでさけんでいる。

「あーあ、だらだら、しずくたらして……。きたないからすてなさい。新しいのをまた姉さんたちに、作ってもらえばいいよ。」

自分でゆった、ちびた丸まげに、姉さんかぶり、大きなおなかのかあさんが、井戸ばたで、大根を洗いながら、ふり向いてこたえる。

午後まで日のあたらない井戸のまわりは、雪がまだいっぱい残っていて、ところどころ、フキノトウや、スイセンの芽が黒土の中からうす緑の頭をのぞかせている。

屋根の雪がとけて、ばらばらと、たえまなく、雨だれのように落ちてくる軒下をくぐって、玄関からとびだそうとした二才で五女のハッちゃんが、水たまりに足をすべらせて、ばしゃんところぶ。アーンと泣きだす。

「かあさん、ハッちゃん、また、ころんだよ。」

「ころんだよって、見てる人いますか。早く、つれてきなさい。」

びしょびしょの、どろんこ雪の上に、まともにころんだハッちゃんは、着物も、タビも、おかっぱの頭まで、あんころもちの、どろだらけ。そのうえ、涙と鼻水が、い

つしょになった顔で、アーンと口をあけて泣いている。
「さあさ、つっ立ってないで、黒い小タンスの、下の引き出しから、ハッちゃんの着がえ、持っておいで。下着も、前かけもだよ。」
かあさんは、小さなハッちゃんを、はだかにして、井戸の流し場に立たせ、ごしごし、どろを洗い落とす。もう、外ではだかになっても、そう寒くない気候だ。
「ほんとに、ハッちゃんったら、一日に何度ころんでくるもんだやら。家の中で、おとなしく遊んでてくれたら、もんくないのに。」
かあさんは、手早く、ハッちゃんに着がえさせてから、よごれものを流し場のふちにおいて、また、大根を洗いつづける。
「さ、こんどは、家の中で遊ぶんだよ。トコも、もうじき、学校へあがる姉さんだからね、ハッちゃんのめんどうを、よくみてあげるんだよ。」
「学校」といわれたトコは、きゅうに姉さんぶって、小さなハッちゃんを、だきかかえるようにして、縁がわから茶の間にあがらせる。
そこへ、小学校三年生で、三女のケイコが、しょいカバンのままとびこんでくるなり、ただいまもいわず、

「かあさん、お堀ばたのコブシの花、もうさいたよ。きれいだからとってきたあ。ビンにさしておくよ。」
と、大声でさけぶ。着がえたばかりのハッちゃんを見つけて、
「あーらあ、ハッちゃん、いいべべ着てる。また、ころんだね。」
「ハッちゃんもいいけど、ケイコは学校からかえって、足と手洗ったの？　また木にのぼったんだね。お堀に落ちても、かあさん知らないよ。ころび屋さんは、ハッちゃんひとりでたくさん。」

磯村家の一家が、県南の城下町、湯沢から県庁所在地の、この秋田市へ越してきたのは、ケイコが一年にあがる前の年だったから、いまから三年前になる。山林関係の仕事についたとうさんの、勤めのつごうで、上の二人の兄さんが生まれた北海道をあとにしてから、横手、角館、湯沢など、県内を何か所も転てんと移り住んだ。

その間に長女を一人なくしたが、いつのまにか子どもが、五人にふえていた。これから、みんなは、どんどん大きくなるし、学校のこともあるから、どこかいい場所に落ちつきたい。そう思ったやさき、とうさんの営林局本署づとめがきまったのだった。

角館ではじめた、かあさんの、お産婆さんの腕も上がったし、いままでの貧乏生活からぬけだす、よい機会でもあった。

さいわい、湯沢町で親しくしていた方のお世話で、いい家が見つかった。

ここは、久保田城趾、千秋公園の裏手にある、閑静な町で、環境もいいし、家がせまいのをがまんすれば、子どもたちの教育には、またとない、いい場所だと両親はよろこんだ。

この家は、前に、どんな人が建てて住んでいたのだろう。四畳半の茶の間と、六畳の客間の、二間きりの平家建てなのに、玄関も門もついている。柱も、はりも、天井も、建具も、しっかりしていて、まわりには縁がわが、はりめぐらされている。生け垣に囲まれた前庭には、植えこみがあって、庭石の配置も、品よくととのっている。

前庭のひとすみには、深い井戸があって、近所の人がうらやむほど、おいしい水が、こんこんとわいている。玄関の、向かって右手には、竹垣があり、くぐり戸をぬけると、そこも小さな庭になって、裏の二百坪ほどの果樹園につづいている。

もし、どこかの、上品な老夫婦が、ひっそり住むとしたら、こんな居ごこちのいい家は、またとなかっただろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

でも、引っ越してきたときには、もう、長男のひろし兄さんをかしらに、子どもが五人。両親とあわせて七人の大家族であった。昼間はみな、学校や勤めに出るからいいが、夜、寝るときは大そうどうだ。しかたなく、上の兄さん二人の部屋にと、大家さんのゆるしを得て、離れにバラックの六畳一間を建てました。そのよく年ハッちゃんが生まれ、ことしの夏には、もう一人生まれることになっている。でも、磯村家の人たちは、みな素直なのか、不平一ついわず、それぞれに、この家の住みごこちを楽しんでいた。

三月末から四月はじめにかけて、学校へかよう子どもたちには、いちばんいやな季節だ。

ポカポカと、あたたかい日がつづくのはいいが、凍っていた土が、雪といっしょにとけて、町じゅうがどろんこ道になる。馬フンやワラくずやミカンの皮のつぶれたのが、あちこっちに散らばって、あるくのに気持ちがわるい。ハカマの下にモンペをはいていっても、帰ってすぐどろを洗い落とさないと、乾いてからでは落ちにくい。

それでも、公園のお堀ばたの、背の高いコブシの木が、白い大きな花を枝いっぱい

さかせるころになると、これがまるで、春の前じらせのように、町じゅうも家の中も、うきうきと落ちつかなくなる。子どもたちは、みな学年が一つ上へ進むし、草の芽や、木の芽が、いっせいに芽ぶきはじめるからだ。

残り少なくなった残雪をおしんで、小さいトコたちは、へいのかげや、庭石の間の、水っぽい、すすだらけの雪の中を、ピシャピシャと、あるきまわったり、黒くよごれたどろんこ雪を、器に入れて、家の中に持ちこんでは、そのたびに、かあさんにしかられている。

やがて、雪どけのどろがかわいて、春のからっ風がその表を吹きぬけ、道の土が白くかたまるころになると、まちかまえていた町の子どもたちがとびだしてくる。うちの前のせまい道路は、このへんの子どもたちにとって、かっこうの遊び場だった。

「トコちゃん、あそぼ。」

朝ごはんがすむと、トコと同い年のとなりのれい子ちゃんがやってくる。門があるのに、わざと生け垣のすき間を広げて、あなから顔をのぞかせる。そこからは、トコたちが遊んでいる縁がわも、家の中も、まる見えだ。

「いま、いく」

と、トコは玄関にまわる。ハッちゃんが、あわててあとをおう。

家の生け垣の外は、せまい道路をへだてて、きゅうな高い土手になっている。

土手の上には、もと藩主だった人のやしきがあって、下から見ると大きな門の屋根だけが見える。おやしきの人たちは、いまは東京に住んでいて、たまにしか帰らない。

いつか、この門から、リボンをつけて、ハカマをはいた、小学生のおひめさまが、人力車で駅のほうへいくところを見た人がいたそうだが、いまどき、そんなはずがない。おおかた、公園のキツネに化かされたのだろうと、町の人たちはわらって話していた。ともかく、いまはあるじがいなくても、もと殿様の子孫の家なので、みんなは「ご別荘」とよんでいた。

ご別荘の高い土手は、春がくると、ヨメナ、ツクシ、タンポポ、スミレ、フキノトウ、イタドリ、スカンポなど、思いのままに芽をだし、葉を広げ、花をさかせては、下の子どもたちにさそいかける。ケイコたちの家は、ちょうど、門のま下で、土手がいちばん高くなっているところなので、冒険ずきな子どもたちが自然に、ここに集まってくる。

ご別荘の門には、ほとんどいつも、門番のおじいさんが見はっていた。子どもたちは、長い棒を持った、しらが頭のおじいさんの目をかすめては、土手のぼりに挑戦する。背をまるめ、頭を低くして、はうようにのぼっていくのだが、土手の中ほどでたいてい見つかり、

「こらーっ。」

と、大きな雷が落ちてくる。

「わあっ。」

と、にげる。また、のぼる。しまいに、おじいさんが、長い棒をふりまわすまでイタチごっこは、つづく。

きょうは、どこまでのぼれたと、そのスリルが、また楽しいのだ。

午前中は、まだ、学校へ上がらないチビだけだから、門番のおじいさんは、見てみぬふりをしている。のんびり、タバコをふかしているらしく、下からは煙だけが見える。道は車も通らないし、トコは、小さなハッちゃんが、土手の下のみぞに落ちないよう、見はっているだけでよい。

やがて、昼近くなると、カタカタと筆箱の音をさせ、しょいカバンを手でおさえな

がら、一年生たちが帰ってきて、まもなく二年生も帰ってくると、このあたりは、きゅうにぎやかになる。土手のぼりはお手のものだし、どなられると、なおおもしろがって、かわりばんこにのぼっては、おじいさんをいらいらさせる。

このへんの、チビたちのガキ大将は、れい子ちゃんちと反対どなりの、二年生のたけちゃんだ。ほんとうは、ケイコと同じ年だから、三年生のはずなのに、一度落第したので、まだ二年生だ。せいは、ケイコより大きいし、力だって強い。いつも向こうどなりの、車屋のげんぼちゃんをしたがえている。げんぼちゃんのとうさんは、このへんでは、のんべで有名だ。夜おそく、よっぱらって帰ってきては、家の前でわめいている。静かな町だから、その声が遠くまで聞こえる。

このごろ、たけちゃんは、どこから見つけてきたのか、一メートルぐらいの細い竹の棒をふりまわし、土手の草をたたきながら、

「スッポンポンは、モノアズケ。」

と、道のまん中をいばってあるくことをはじめた。すると、げんぼちゃんや、小さい子たちが、うしろに一列につづき、まねをして、

「シュッポッポーの、アルアルキ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com